



名古屋造形大学 空間作法領域

溝口周子研究室

1

1 岐阜県八百津町のプロジェクトでは製材所を見学した 2・3 豊田地域医療センターはインテリアプランニングアワードで優秀賞を受賞

06

新しい発想で 自然と融和した美しいデザインを

自然と建築が融和したデザイン

「自然と建築を融和して考える」ことが溝口教授のポリシーだ。専門は建築ではなくインテリアだが、自然と建築は一体で考えられるものだと思え、建物の外にも空間の場ができることを意識してデザインを行う。大学の授業では、インテリアの店舗設計であってもランドスケープに気を配り、自然とその空間との親和性を考えてデザインをするよう学生に伝える。名古屋造形大学では工房と密接につながった実技授業が多く行われる点の特徴だ。学生は入学してすぐ、小さな木の食器から始まり、金物彫金工房でフォークやスプーンを、陶芸工房では陶器のカップを製作する。一般的な工学部で建築を学ぶ場合とは違って、実際に手を動かしてものをデザインする機会が多いのは芸術大学ならではの、木に関しても、椅子や



2



3

ベンチをつくるなど課題を通して普段から木に馴染んでいるという。「学生には大学での多くの製作経験を活かして、いろいろな活動に参加してほしい」と溝口教授は話す。

2021年には岐阜県八百津町の林業従事者や工務店と共同で「八百津町の木材を使って小さな家をつくらう」というテーマでプロジェクトを立ち上げた。学生と八百津町の大工さんや製材所の方々が一緒になって取り組んだ本プロジェクトでは、デザインを行う前に森での伐採から運搬、製材に至るまでの流れを現地で視察した。「いきなり木が角材であるわけじゃなくて、森から木が伐り出されて角材になる過程を実際に目の前で見て体験させていただきました。そうして出来上がった角材を使って私たちはデザインをする、という一連の学びを得る貴重な機会でしたし、プロジェクトの中で流通や価格、輸入材の問題といった日



4 岐阜県八百津町のプロジェクトでは伐採の現場にも立ち会った
 工さんから説明をいただいた

5 伐採された木材が集まる森の市場を見学 6 現地の大

7 製材の作業も見せてもらう



本の林業の課題についてもお話を聞き、とても貴重な経験を学生とともに私もさせていただきまし
 た」と語る溝口教授は、「来年以降も日本の木を守って
 いくために、木に関するプロジェクトをやっ
 ていきたいです。いろいろな機会があれば参加し
 たいなと思っています」と木材の利用に意欲的だ。

発想の新しさ デザインの美しさがポイント

今回審査員としてコンテストに参加した溝口教
 授は「やっぱり毎回すごく面白いアイデアが出て

いるので、刺激を受けます。私たち自身も自分の
 作品で木を使う時の参考になりました」と話す。
 溝口教授にとって一番の評価のポイントは、木の
 新しい使い方をしているかどうか。細かなディテ
 ルの善し悪しや構造的な部分は後で多少フォ
 ローできるとして、まずはアイデアの発想力に重
 きを置いた。

その次に注目するのはデザインの美しさだ。「発
 想が良くてもデザインが美しくないものは商品とし
 ても売れないですし、評価のポイントとしては低く
 なる」と話す。「美しいというも人それぞれバラ

バラなので難しい基準だとは思いますが。でも、黄
 金比というものがあるように、やっぱり世界
 中の人間が美しいと思う共通のバランスがある。
 新しい発想といろいろなバランスの組み合わせが
 全体として整っていることによって、皆さんが共通
 して美しいと感じる基準になってくる。多くの人が
 美しいと思うものは何かということは何を評価す
 る際のひとつの基準であると思うんですね。やっ
 ぱり工学的なことの前に、美しくなければものとし
 て成り立たないと考えていて、常々学生にもデザ
 インの美しさまで意識するよう教えています」と語
 る。

小さな部品ひとつの寸法感覚から 建築は始まる

ものづくりとは、基本的には立体をつくることだ。

内藤廣「海の博物館」

「私が学生時代に、木の空間っていいなと思ったきっかけが内藤廣さんの海の博物館。ヴァンキュラーな建築というか、すごく地域性がある自然と融和した建築だったんですね。大断面木造の大空間を見たときには木造の可能性を感じましたし、「やっぱり建築と自然って一体でデザインされるものだな」と気づかされました。初めて目にしてからもう30年ぐらい経ちますが、今でもまったく色褪せていない。内藤さんはすごく真摯に空間に向き合っ
 て木と会話をしているような建築をいつもつくられるので、インテリア空間としてもとても素敵だと感じています」



見るべき「木」の空間 01



8

8 八百津町の住民の方とのワークショップ 9 豊田地域医療センターで行った和紙制作のワークショップ



9

見るべき「木」の空間 02

藤森照信「ラコリーナ」と 長野「神長官守矢史料館」

「自然と建築の関係という意味では藤森さんも面白い。おそらく藤森さんは木を意識しているというより、その地域の環境を意識されていると思うのです。そうしたら自然と建築に木が入ってくるということじゃないかなと。その環境に石があれば建築にも石が入ってくる。建築の周りの環境に根差した木の活かし方をしているのがとても素敵だと思います」



「建築もひとつの立体ですので、ディテールも含めて実際につくることを考えなくては行けない。そういう意味で、実際につくるという体験を学生のときに何かひとつはした方がいいと思います」と溝口教授。

建築というすごく大きなものをイメージしがちだが、建築も結局はいろいろな立体の組み合わせでできているという。建築を分解していくと家具になり、さらに家具の中には雑貨、といったようにいろいろな生活の道具に分解されるが、それらすべては立体だ。「そんなふうには立体を細かく分解していった小さなひとつの単位を実際に自分の手で作ってみることから、まずは小さなツマミひとつの寸法感覚から始まると思うんです。すごく小さなディテールから寸法感覚を学生に身につけてもらうためには、やっぱり自分の手で何かをつくる作業はとても大切な経験です。自分でつくったもののサイズ感が、次はもう少し大きな椅子になり、次はもう少し大きなスペースか大きなものになっていく。そして最終的には建築になる。その一連の建築をつくることと、小さな道具をつくることは、ものづくりとして感覚はそんなに変わらないことだと思っています」と、どんな建築も立体

であるという意味で、小さな部品ひとつを自分の手で作る経験がいずれ大きな建築の設計にも通じると述べた。

また、溝口教授は自由な発想で木の新しい使い方を模索することに意味を見出す。「やっぱり木の利用方法って普通に考えると木造住宅や家具、家具の構造材とかしか考えられないんですけど、それでもそこに少しアイデアが加わると、こんなにも使えるんじゃないかというように新しい木の使い方を学生なりの若い発想で考えてもらいたいですね。そのためにも、学生たちにはやっぱり木を、特に日本の木を使うことを考える機会に参加してほしいです」木の新しい活用法を考えるにあたって、普段の大学の授業だけではなく他大学の先生や社会に出ている方の意見をいただく機会は貴重だ。「今回のコンテストでは一般市民の方の目に触れる場所で発表できるということで、広く市民の方々の意見を聞くことができます。そういう意味でこういうコンテストに参加する意味がある」と話す。社会で人々に長く使われるものづくりを目指そうえて、今回のコンテストのような機会に積極的に参加する意義は大きい。



溝口周子 教授

みぞぐち しゅうこ / 京都工芸繊維大学住環境学科卒業。
(株)日建設計グループ 日建スペースデザイン入社。25
年に亘り、ホテル、病院、オフィス等のインテリア設計に携
わる。2015年より、+wow design associates主宰、名
古屋造形大学専任教員。現在空間作法領域教授